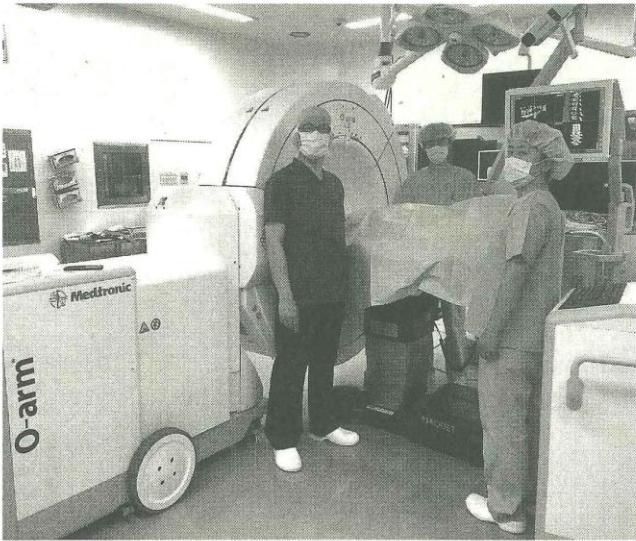


難しい脊椎手術 安全性向上

最新鋭モバイルCT導入

製鉄記念室蘭病院(室蘭市知利別町、前田征洋病院長)は、最新鋭の術中モバイルCT(可動式コンピュータ断層撮影装置)を導入した。脊椎変性疾患や脊柱変形手術などの対応増などに伴い、2013年(平成25年)に導入した同タイプの機器を更新した。新モバイルCTは、被ばく量低減や撮像幅が広がるなどの長所があり、同病院は「脊椎脊髄外科診療の一層の発展につなげたい」としている。(松岡秀宜)

製鉄記念室蘭病院



導入したのは最新鋭の術中モバイルCT「O-arm2」(日本メドトロニック社)。これまでの機器「O-arm」と比べ、術中CT被ばく線量が約半分にとどまるといふ。同病院が積極的に行う脊柱変形手術や低侵襲脊椎固定術(MIST)では、手術中に「O-arm2」を使用することで位置確認が高精度に行えるため、「難度の高い小児や成人の脊柱変形手術や脊椎靭帯骨化症などの手術成績や安全性が飛躍的に高まる」(小谷善久副院長・脊椎脊髄センター長)という。

時間が短縮され、より効率的な手術も可能になる。術中モバイルCTは、コンピュータナビゲーションシステムと組み合わせることで、手術中に術野の透視画像や3次元画像などが撮影でき、その画像は、コンピュータナビゲーションへ即時に転送される。このため、患部の術前と術中比較も、リアルタイムで容易に進められるため、同病院では脊柱変形や脊椎腫瘍、脊椎靭帯骨化症など、主に脊椎脊髄手術で活用。O-armを導入した13年6月以降、900例を超える手術に用いてきたが、患者

増などに合わせて「複雑な症例も増えている」(同)実情もある。こつとした現状に対応するため、最新鋭の術中モバイルCTに更新した。既に今年5月から稼働し、週5、6例の手術に使用しているという。日本MIST研究会の会長としても活躍する小谷副院長は、「術中3次元画像が得られることで手術精度が向上するだけでなく、手術時間の短縮や出血量の減少など、患者の負担も低減されます」と強調。高精度で安全な脊椎手術を求めて、道内全域から多くの患者が訪れているという。